イギリス文芸批評に於ける想像力説の伝統

その形成と継承（その一）

岡　本　昌　夫

序論　文芸批評と想像力説

人間は万物の霊長と云われる．その万物の霊長たる所以は色々あるであろう．或いは人間は理性的動物であるといい，また意志的動物であるという．また常に理想をかかげてそれに近ずこうとする点に於て他の総ての動物と異るとも考えられる．更に又隣人を愛し，神を愛するという愛の精神にこれを求めることも出来よう．然し同時にまた人間はものを創り出す存在であるという点に於て他の総ての存在と区別することも出来るのである．

物を創り出すといっても，家を作り，田を作り，又は日常身につける衣類を作るといった実用的生産よりもむしろ，詩を作り，絵画をえがき，彫刻をほるといった芸術的生産に於て，人間はより重要な働きをなしていると云わねばならない．そしてこの人間を他の存在と区別する芸術活動こそ，最も人間らしく，また，最も崇高な働きであるといえるであろう．

この最も人間的な芸術活動をなさしめる原動力は一体如何なるものであろうか．如何なる性質を持ち，如何に働らき，如何なる原理に基いて働らくのであろうか．それは理性や悟性と如何に関係するであろうか．直観と如何に関係するであろうか．それは万人に存する力であるか或いは或る特定の人，即ち天才とか能才とかいわれる若干の人にのみ存する能力であるのか．其他いろいろの疑問が起って来るであろう．第一その能力を何と名

づけたらよいのであろうか.

この問題は文芸批評に於ける最も根本的な問題であり，この問題の解決の仕方によって文学の見方が根本的に異るといってよい問題でもあるのである．イギリス文芸批評に於ては，この問題は古くから取上げられ，十九世紀ローマン主義以後いわゆる想像力説（Imagination Theory）として定着したといってよいのである．然しローマン主義以前に於ても，色々の形でこの問題は想起されて居り，またそれ以後に於ても若干の曲折を経て今日に及んでいるのであって，想像力の問題は極めて興味ある問題となっているのである.

さて文芸批評の立場に於て，この芸術創造の原動力を想像力（Imagination）と名づけ，それを芸術活動に於ける最高の能力と見做し，また，芸術評価に於ける根本的規準としたのは，十九世紀初頭に於けるローマン主義詩人にして批評家なる S. T. Coleridge であったが，想像力の断片的思考は既に早く Elizabeth 朝詩人や批評家の間に見られるのである.

Imagination なる語は image, imagery, imagine などと共に Latin の imago（imitation, image）を語根として発展した語であって，英語としては十四世紀に於て既にその用例が少なからず存し，Chaucer, Langland, Gower などの文章に見られることは N. E. D. の示す通りである．その意味が，単に外的な形象や概念を思い起して形成する能力の意味や，外的形象をはなれた空想的思考の働きの意味，即ち reproductive imagination や productive imagination の意味だけに止まらず，更に高度な「新しく顕著な知的概念を構成する能力」若くは「最も高度な心の創造的能力」即ち「詩的天才」の意味に用いられたのも十六世紀に遡ることが出来るのである．Shakespeare には，その *A Midsummer-Night's Dream* (1590) の中に，

'And as imagination bodies forth
The forms of things unknown, the poet's pen

Turns them to shapes, and gives to airy nothing
A local habitation and a name.'

(V. i. 14–17)

「想像力が未知なるもろもろの姿を
具象化するにつれて，詩人の筆は
それらの姿を形に変え，空虚なる無に
住むべき場所と名を与える.」

と述べる個所があるが，これは高度な想像力の性質を極めて巧みに述べたものであるといえよう．これによって見れば，十六世紀に於て既に眼前にないものの姿を眼前に彷彿とさせるという独創的精神の意味に於て想像力なる語が用いられていることを知るのである．ここには確かに Coleridge などローマン主義の作家が用いた意味と共通なものがあるのであるが，然し Elizabeth 朝に於ては批評家がこの想像力の意義を重視し，これを取上げて論じ，或はまた，この独創的精神としての想像力の思想に基いて作品を批評するということはなかったのである．Elizabeth 朝には Sir Philip Sidney を初めとして幾多の批評家がいるのであるが，彼等は何れもフランスやイタリヤの文芸思想の影響の下に，Aristotle の詩学（*Poetics*）に由来するいわゆる模倣説を取り，詩はすべて外界の模倣であると信じ，一にも二にも imitation なる語を用いて文学を論じ，文学本来の精神である作家の独創的精神を軽視し，その根源としての想像力の重要さを認識しなかった．まれに imagination という語が用いられるようなことがあっても，それは極めて底の浅い技術的な意味に用いられるにすぎなかった．

私は本論文に於て，第一篇に於てはイギリス十八世紀末に至るまでの模倣説の概要を述べ，その時代に於て如何に文芸批評が他律的精神に支配されて自我の解放としての独創的精神を軽視して来たかを論ずると共に，その間にあって，独創的精神の重要さを自覚し，想像力の真意を把握し闡明して行った若干の人々の輪廓を示しそ，の系譜を明らかにすると同時に，想像力思想が学問的には Bacon, Locke, Hume などのイギリス哲学や Kant

などのドイツ哲学に負うものなることを説き，それらの影響の下にイギリス独自の文芸批評の根底としての想像力説の形成の段階をさぐり，次に第二篇に於て，その想像力説の確立者としての S. T. Coleridge の知的環境とその学説の形成過程を考察すると同時に，彼によって表明された想像力説の細部に立入り，Imagination ならびに Fancy について彼が与えた定義の真義をさぐりたいと思う．元来それらの定義は極めて簡単であり，又 Coleridge 独自の用語を用いているため，その真義は屢々誤り解され，又皮層的な解釈に止まり，それを以て‘philosophic jargon’などといって真剣な解釈を放棄するような向もないではなかったが，筆者は微力を顧みず，各方面の学者の解釈を考慮すると同時に，今日まで余り顧みられなかった hayathologia 的解釈を試みた次第である．独断のそしりを免れないかとも懸念するが，*Biographia Literaria* に於ける Coleridge の哲学的意見（特に彼が畢生の大著 *Logosophia* に於て述べようとした Theses に見られるもの）などを勘考するならば，筆者の解釈の如きも大した見当違いではないように思われるのである．かく考える時 Coleridge の想像力説の歴史的位置が明らかになると同時に，その特異性が明らかとなり，同時代或は後代の想像力説以上に彼の思想が高邁であり，又深遠であることがわかると思う．更に第三篇に於ては，Coleridge によって確立された想像力説が，同時代に於て如何に受容れられたか，また，後代に於て如何に受け継がれたか，また，現代に於て如何に考えられているかを考察して見たいと思う．

第一篇　想像力説への道

第一章　アリストテレスの模倣説の意味とその影響

批評精神は文化の発生と共に生じたといってよい．或は知的精神の存するところ批評精神があるといってもよいであろう．具体的に云えば，批評精神は既にギリシャの古に於てその華を咲かせ，文芸批評もまたギリシャと共に初まったのである．即ち，Homerの詩や Æschylus, Sophocles などのギリシャ劇に対する反省は，Aristotle をして *Poetics* を書かせたのである．かくて Aristotle は万学の祖たると同時に文芸批評の祖となり，その著は最も古く又最も価値ある批評の古典として，長くヨーロッパ社会に受けつがれ，今日もなお高い地位を保つのであるが，それが文芸復興期以来十八世紀末に至るまで，ヨーロッパ文芸界を如何に支配したかは実に驚ろくべきものがある．殊に「悲劇は人間行為の模倣である」(Poetics VI, VII etc.) なる言葉に発するいわゆる Aristotle の模倣説は，特殊な意味を以って解され，広く一般文芸思想を支配したのである．イギリスに於ける実情を詳しく検討し，それが時代の文学や批評と如何に関係したかを見て行きたいと思う．

Spingarn の名著 *Literary Criticism in the Renaissance* (1899, 1925) によれば，Aristotle の *Poetics* は12世紀に於て Moslem の哲学者 Averroës によって始めてヨーロッパに伝わり，13世紀に及んでドイツ人 Hermann によって初めてラテン語に飜訳され可成り行き渡ったようであるが，それがイギリスに入ったかどうかは明らかでない．やがて1498年 Giorgio Valla のラテン語訳が Venice で出版され，1508年 *Poetics* のギリシヤ原

① Aristotle 以前に Plato はその *Republic* (Jowett's translation X. 596-7) や *Laws* (ii 667-8, vii, 814-16) に於て，絵画，詩，音楽，彫刻などの芸術は総て模倣であると述べている。然し後世の詩論に於ける影響は Aristotle の方が圧倒的に強いといってよい。

典が *Aldine Rhetores Graeci* の中に出版され，更に1536年 Alessandro de' Pazzi がラテン語訳を，1548年には Robertelli が *Poetics* の最初の critical edition を出版した．それには Latin 語訳と学問的な註釈が附されて居り，従って Aristotle の詩学は十六世紀に於て急に一般の注目をあびるに至ったといってよいのである．

かようにイタリヤに於て盛んになった Aristotle 熱がイギリスに伝わらぬ筈はない．とうとうとイタリヤ文化が流入していたエリザベス朝のイギリスである．Aristotle の学説が影響を及ぼしたとしても何の不思議もないのである．

Elizabeth 朝に於て Aristotle の影響が最も明瞭に現われているのは Sir Philip Sidney (1554–86) である．彼はその *An Apology for Poetry* (1595)〔別名 *The Defence of Poesie*〕に於て，全く Aristotle に従って詩を定義し，又詩の性質を説明しているのである．即ち彼は詩を定義して次の様に述べるのである．

> 'Poesy therefore is an arte of imitation, for so Aristotle termeth it in his word *Mimesis*, that is to say, a representing, counterfetting, or figuring foorth: to speak metaphorically, a speaking picture: with this end, to teach and delight. Of this have beene three severall kinds.①'
>
> (「故に詩は模倣の芸術である．何となればアリストテレスは詩をミメシスという彼の用語によってそのように定義している．即ち表現し，模倣し，形象化するもの，たとえていえば，ものをいう絵であって，教えかつ喜ばせるという目的を持つものである．これには三つの異なった種類がある」)

ここでは詩を模倣芸術であると定義して後，それを更に「表現し，模倣し，形象化するもの」と説明し，「ものをいう絵」にたとえ，更にその目的を「教えかつ喜ばせることである」と述べているのである．Sidney 自身認めているように詩を模倣芸術とすることは明らかに Aristotle の説で

① Smith: *Elizabethan Critical Essays*, p. 151. Edmund D. Jones: *English Critical Essays*, (XV–XVIII), p. 10.

あり，その模倣説がここに明らかに示されているということが出来る.[1]

Sidney が Aristotle の影響を受けているのは，ただこの詩の定義に於てのみではなく，他にも Aristotle の用語を屢々引用しその説を敷衍しているのである．即ち彼は同じ論文の他の箇所に於て詩を定義して

'Poetry is Philosophoteron and Spoudaioteron, that is to say, it is more philosophical and more studiously serious than history.'[2]

(「詩はフィロソフォテロンでありスプーダイオテロンである．即ち，詩は歴史よりも一層哲学的であり，一層真摯である.」)

即ち Philosophoteron や Spoudaioteron は何れも Aristotle が *The Poetics* に用いている言葉であって今日では広く知られる言葉であるが，Elizabeth 朝に於てこの言葉を用いたことは，Sidney が殊に Aristotle の言葉をそのまま用いることによって自説を権威づけようとしたものと考えられるのである．また Sidney は詩は歴史より一層哲学的であり，また，真摯であるという Aristotle の言葉を説明する場合にも Aristotlo 自身の言葉を引用して，詩は Katholou 即ち普遍的な思考 (the universal consideration) を取扱うに反して，歴史は Kathekaston 即ち特殊 (the particular) を取扱うものであるといっている.

Sidney はまた，詩一般を模倣芸術であるというと同時に，その一種である喜劇や悲劇をもやはり模倣の芸術であると定義した．喜劇は次のように定義されている.

'Comedy is an imitation of the common errors of our life.'[3]

(「喜劇は我々の人生に起り勝ちな誤りを模倣するものである.」)

Sidney が Aristotle 説の真意をどこまで解していたかは容易に決し難

---

① この定義の最後に述べられた「教え喜こばせるという目的を持つ」という言葉は Aristotle からというよりは Horace の有名な Epistle to the Pisos 中の言葉によったものと思われる．Cf. Saintsbury: *Loci Critici* p. 57.

② Smith, op. cit., p. 167. Jones, op. cit., p. 20.

③ *English Critical Essays*. p. 31.

いが，兎に角彼が Aristotle を読み，その説を奉じていたことは間違のないところである．その際，彼が Aristotle の用語 mimesis を imitation と訳し，芸術は imitation なりとしたところに誤解の原因があるのであって，これは十六七世紀全般に亙って，多くの誤解を生む原因となったといってよいのである．即ち Aristotle の云う mimesis というのは，もののあるべき姿，即ちものの本質を写し出すという意味であるのだが，それを単に imitation と訳して 'Poesy is an arte of imitation! といえば，そこに誤解が生じるのは当然である．Sidney 自身，先の詩や喜劇の定義の仕方から見れば Aristotle の真意を充分に理解していたとは云い難いのである．模倣といえば，他の何ものかを模倣することであり，ややもすれば主体性，独創性を欠いた盲目的模倣の意味に取られ勝ちであり，また自然の模倣でなく，他の作家，先人の模倣の意味にも取られ，愈々独創を忘れたものになるのである．Sidney が Aristotle の説をイギリスに紹介した功績は大であるが，同時に誤解の種を播いたものといわねばならない．

Elizabeth 朝に於て Aristotle の説を奉じ，或はその説をよしとした批評家は Sidney のみではない．George Puttenham は *The Arte of English Poesie* (1589) に於て[①]，又 Sir John Harington はその *Orlando Furioso* の英訳の序文 (1591) に於て[②]，何れも Aristotle の模倣説に基いて論を進めている．私はこれらの諸家の Aristotle の理解の程を詳細に論ずるいとまはないが，私の云いたいことは，Elizabeth 朝に於て Aristotle の模倣説が，文芸批評の領域に於て大きな影響を持ちつつあったということであり，それが十七八世紀の文芸批評にも同様に力を持つ原因にもなったということである．

十七世紀の文芸批評の大要を知るには，我々は先ず John Dryden の批評を見るにしくはない．たとえ我々が Dryden を 'the father of English

① Cf. Atkins, *English Literary Criticism, the Renascence*, p. 156 ff.

② Cf. Smith, ii. p. 200 ff. Atkins, op. cit., p. 187 ff.

Criticism[①]' と考えないとしても，彼が十七世紀最大の批評家であることは疑いないところである.

さて我々は Dryden に於ても Aristotle の模倣説の影響を明らかに見ることが出来るのである. 例えば，彼が詩と絵画を比較した論文 'A Parallel of Poetry and Painting' を取って見るならば，そこには詩も絵画も自然の模倣であると説いて次のように述べているのである.

'The imitation of nature is justly constituted as the general, and indeed the only rule of pleasing, both in poetry and painting[②]'

(「詩に於ても絵画に於ても，自然の模倣こそ正に，喜こびの一般原則であり，また実に唯一の原則とされるものである.」)

彼はまた詩も絵画も熱情を模倣するものであり，その故に我々に喜びを与えるのであるといって次のように述べるのである.

'They are imitations of passions, which always move, and therefore consequently please; for without motion there can be no delight, which cannot be considered but as an active passion. When we view these elevated ideas of nature, the result of that view is admiration, which is always the cause of pleasure.[③]'

(「詩も絵画も情熱の模倣である. 情熱は常に動くものであり，その故に喜びとなるものである. 何となれば，動きなきところに喜びはない. 喜びは能動的情熱とより考えられない. 我々がこれらの高邁な自然の理念を考える時，その考えの結果は賞讃であり，その賞讃は常に喜びの原因となるのである.」)

われわれはこれらの引用のみによっても，Dryden が Aristotle の影響を蒙っていたことを窺い得るのであるが，更に我々は彼の最も著名な批評論文 *An Essay of Dramatic Poesy* (1668) を取上げて見よう.

この論文は，時と場所の一致や韻律の問題を中心として古典劇と近代

---

① Dr. Johnson: *Lives of the English Poets.* 'Dryden.'

② *The Works of John Dryden.* Printed for William Miller, London, 1808, Vol. xvii, p. 310.

③ Ibid., p. 312.

劇，フランス劇とイギリス劇，エリザ朝劇と十七世紀劇などを比較検討したものであるが，そこには常にアリストテレスの詩学が考えられていたことは明かである．時の一致や悲劇論に於て，Aristotle の名が直接引合に出されている[①]というだけではなく，この論文全体が Aristotle の影響下に書かれているのである．たとえば我々はこの論文のうちに，Neander がフランス劇とイギリス劇を比べて，イギリス劇が決してフランスのそれに劣らないことを述べた際，その理由を次のように述べる言葉を見出すが，そこにアリストテレスの模倣説の証差を見出すように思うのである．

'For the lively imitation of nature being in the definition of a play, those which best fulfil that law ought to be esteemed superior to the others. 'Tis true, those beauties of the French poesy are such as will raise perfection higher where it is, but are not sufficient to give it where it is not: they are indeed the beauties of a statue, but not of a man, because not animated with the soul of poesy, which is imitation of humour and passions.[②]'

(「何となれば，自然の生々とした模倣ということが劇の定義に含まれるのであるから，その法則を最もよく満たすものが他のものより優れていると考えられねばならないのである．まことに，フランスの詩のあの美しさは，完成したところではそれを愈々高めるが，完成に至っていないところではそれを与えるに充分ではないのである．その美は実に塑像の美であって生きた人間の美ではない．何となれば，それは，気質と情熱の模倣である詩の塊を以て生かされていないからである．」)

ここに Dryden がいう「自然の生々とした模倣」や「気質と情熱の模倣」という言葉が，単なる盲目的模倣，即ち単なる copy を意味しないとしても，模倣という言葉が本来持っている他律性を表わさないとはどうしても云えないのである．従って Dryden のこの論文はやはり古典主義に基く批評であり，ローマン主義的精神とは程遠いものであるといわねばならないのである．

以上によって十六七世紀のイギリスに於て Aristotle の影響が如何に大

① Dryden: *An Essay of Dramatic Poesy*, ed. by T. Arnold, Oxford, 1952, pp. 41, 42, 81, 92.
② Ibid., pp. 53–54.

きいものであったかを略述したと考えるが，十八世紀に入ってもこの事態は大して変らなかった．たとえば十八世紀初頭 John Dennis は *The Advancement and Reformation of Modern Poetry* (1701) に於て，詩を定義して，'Poetry is an imitation of Nature by a pathetic and numerous speech.' (「詩は情感的な多くの言葉によって自然を模倣したものである」[①]) といい，その理由を説明して，詩は芸術である故にそれは当然自然の模倣でなければならぬといい，既に Aristotle の言葉を承認した上で論を進めている．然し彼は同じ自然の模倣であっても，散文は詩と異なることを述べるのに，詩は散文よりもより一層熱情的であり感覚的であることを強調している点が注意される．これはローマン主義批評に一歩近ずいているものということが出来るのである．

Joseph Addison もまた Dennis と大差なく，大筋に於てはアリストテレス説に同調するものということが出来る．たとえば *The Spectator* に連載された *Paradise Lost* 論を取って見るならば，[②] Milton の言語や文体を論ずるにあたって常に Aristotle の法則を持出し，Aristotle の言葉に従って論を進めているのである．

然しながら Addison は一方に於て，快的な vision の創作者としての想像力を認め，それについて可成り詳細な説明を加えていることを見のがすわけには行かない．次章に於てこれを検討して見よう．

第二章　模倣より独創へ

前章に於て述べたように Joseph Addison は明らかにその芸術論争に於て Aristotle の模倣説の影響下にあったけれども，*The Spectator* No. 411 (June 21, 1712) に於て，心象と想像力について論じ，Addison 独自の考を述べていることは注目に価することである．すなわち彼はその論文

① *English Critical Essays*, ed. by Edmund D. Jones. p. 238.
② *The Spectater*, No. 285. Jan. 26, 1712.

に於て，想像力の喜びは，視覚的心象の作り出す喜びであるといい，視覚によって得た心象を保持し，変更し，綜合して快的な vision を作り出す能力であると述べているのである．

'We have the power of retaining, altering, and compounding those images, which we have once received, into all the varieties of picture and vision that are most agreeable to the Imagination.'

（「われわれには，われわれがかって受け入れた心象を保持し，変更し，綜合して，想像力に取って最も快適な種々様々な肖像や光景にする力がある」）

Addison によれば，われわれは感覚（sense），想像力（imagination）及び理知（understanding）から，それぞれ独特の喜び（pleasure）を得るのであるが，感覚による喜びは最も低級であり，理知による喜びは最も高級であると考える．しかし想像力による喜びは，たとえ理知による喜びほど洗練されていないとはいえ，如何なる喜びにも劣らず「大きくまた心を有頂天にさせる」ものである．理知による喜びは，それが新らしい知識や心の発展に基くものなるが故に，最高の喜びであるが，想像力の喜びは「一層明晰であり，また一層得やすい」（more obvious and more easy to acquire）という利点を持ち，また，それは美を直感することによって得られる喜びであるから，上品な性質を持つというのである．すなわち Addison は想像力の働きを感覚の働きの上におくけれども，理知の働きの下におくということは，十八世紀流の考え方の特色をあらわすけれども，想像力なるものを美を作り出す能力と考えたところに Addison 独自の進歩した考えがあるといわねばならない．この考えは未だ充分に考えられて居らず，想像力と美的創造についても充分な言及がないが，言葉の端々を拾って考えれば，たしかにこういった考えが入って居り，想像力を芸術の美的創造の原動力とする考えに可成り近ずいているのではないかと感ぜられるのである．もっとも Addison はこの論文に於ては，創造よりはむしろ鑑賞の立場に立って想像力を論じ，「洗練された想像力を持つ人は非常に多くの

喜びに参入することが出来るが，粗野なる人はそれを受取ることは出来ない」と述べているのである．かように Addison の考えは未熟であり，また，想像力と空想力を混同したり，創作と鑑賞とをはっきり区別しなかったり，想像力を古い視覚的心象のみについて論じたりしている点に於て甚だ不充分であるけれども，十八世紀初頭に於て，想像力を文学の創造や鑑賞に結びつけて，感覚や理知と共に人間の精神能力の最も重要なものとしている点に於て，我々の注意を引くものである．

十八世紀のイギリスに於て，Addison の他にも文学と想像力との関係を述べている者がいないわけではない．

David Mallet は *Excursion* (1728) なる詩の冒頭に於て，

> Companion of the Muse, Creative Power,
> Imagination!
> (「詩神の友，創造的能力なる
> 想像力よ．」)

と述べて，想像力が詩の神と共にあることを暗示し，*The Seasons* (1726–30) の著者 James Thomson は，その 'Summer' の中に於て詩人の能力を 'fancy' といい（ここで Thomson は imagination と fancy を混同している），それは

> 'every power
> Exalting to an ecstasy of soul' (l. 19–20)
> (「魂の恍惚にまで高めるすべての力」)

であると説明し，また Lord Kames として知られる Henry Home (1696–1782) は *Elements of Criticism* (1762) なる論文に於て，詩の創作について論じ，

> 'This singular power of fabricating images without any foundation in reality, is distinguished by the name of *imagination*.'[①]

① Op. cit., 1833. p. 480.

(「現実に基ずかないで，心象を形成するこの特異な能力は想像力なる名によって区別される.」)

といって想像力についての考えを示して居り，また William Duff (1732–1815) なる学者は *An Essay on Original Genius* (1767) に於て，想像力の創造的性格を論じ，想像力を特に「創造的想像力」(creative imagination) と呼び，その有無を以て天才の基準とし，'creative imagination' 即ち 'the distinguishing characteristic of true Genius' としている.[①]

即ち十八世紀が進むにつれて，詩人や批評家の心は文学を模倣説から解放して，独自の精神の表現とする考えに向っていったと見ることが出来る. 模倣説をなお強く把持してはなさない人々も，模倣なる意味を拡張し，単なる外物の忠実な模倣というのではなく，そこに新しい工夫をこらすことが作家の任務であるといった考に進んで行った. 工風 (invention) という語が盛んに用いられ初めたのは十八世紀の半ばであることは特に注意されねばならない.

Aristotle に対して極めて批判的であった Richard Hurd は *A Discourse on Poetical Imitation* (1757) に於て，独創的模倣について，

'This primary or original copying which in the idea of philosophy is *Imitation*, is, in the language of Criticism, called Invention.'[②]

(「哲学の概念では模倣に外ならぬこの第一義的独創的模写は，批評の用語では工夫と呼ばれる.」)

と述べている. Hurd より少し後れて，Dr. Johnson は，文学の伝統を守る点に於て人後に落ちぬ人ではあるが，文学に於ける「工夫」の重要さについては屢々言及しているのである. たとえば *The Lives of the English Poets* (1779–81) 中の Milton 論に於て，Milton と Homer とを比較し，

① Op. cit., p. 48. Quoted from Smith: *Words and Idioms*, pp. 94–5.
② Hurd's Edition of Horace's *Epistolae ad Pisones et Augustum*, 1757, vol. ii. p. 106. Quoted from Smith, p. 89.

Milton は Homer ほど大きな構想は持たなかったが，色々の点で創意工夫に富んだ人であり，それが天才の証拠であるといい，また‘The highest praise of genius is original invention’[①]（「天才の最高の讃辞は独創的工夫ということである」）と述べている言葉は広く人に知られるところである．

かくして「工夫」という言葉が十八世紀の中ごろ屢々聞かれるに至ったのであるが，この言葉は詩人の独創的精神を充分に表現する言葉でないことは云うまでもない．単なる思いつきや軽い意味での工夫を意味することも多いのであり，従って十八世紀以前に於ても「工夫」なる言葉を文芸批評の書物の中から見出さないわけではない．たとえば，十七世紀に例を取るならば，劇作家 Ben Jonson の有名な随筆 *Timber, or Discoveries* (1640) に於て，詩と絵画は同種類のものであって，模倣をこととするものであるが，Plutarch についていわれているように，「詩はものをいう絵であり，絵は無言の詩であって，両者は共に多くのものを工夫し，作り出し，案出する (invent, feign, and devise)[②]」と述べて居り，又 Sidney は先にも引用した *An Apology for Poetry* (1595) に於て，詩人は‘invention’の力によつて模倣するものを元の自然よりもよりよい (better) ものにするか，全く新しいものに (quite anew) すると述べて居り[③]，Dryden もまた「工夫」という文字を屢々用い，詩人も画家も共に模倣者 (imitator) ではあるが，そこには「工夫」がなければならぬと説いている．先に引用した *A Parallel of Poetry and Painting* のうちにもそれを見出すのである[④]．

然しながら十六，七世紀に用いられた‘invention’の意味は非常に限定されたものであり，詩人の創造精神の発現としての originality の精神とは可成り距離のあるものであったということが出来る．然るに十八世紀半

① Op. cit., World's Classics, Vol. i, p. 138 Macmillan Edition, p. 118.
② ギリシヤの詩人 Simonides の言葉といわれる．*Loci Critici*, p. 114.
③ Jones: Op. cit., p. 8.
④ *Works*, xvii, p. 314. Cf. Ker: Dryden's *Essays*, i, p. 15.

ごろに及んで，この invention なる語が屢々用いられると同時に，詩人の本来の使命は Aristotle のいう imitation ではなく，他と異った自我の発現としての独創精神であるとする精神が次第に目覚めて来たのである．

元来，文学を他のものの模写であるとする考えは，そのものが自然であると人であるとを問わず，結局に於て他の何物かに依存する結果となり，他律の文学とならざるを得ない．また文学が他律であるということは，描写の対象が外物であって，それによって文学が規制されるというだけでなく，描写の方法や表現の手法が他のなにものかによって規制される結果となり，徒らに古代の法則や韻律を重んずることになるのである．イギリス十八世紀の文学は正にかような他律的文学であったのである．然るに他律は常に人をしてその束縛を脱して自由を求めさせ，自我の解放に向かわせることは理の当然といわなければならぬ．この自我の解放の文学がいわゆるローマン主義の文学であり，イギリスに於ては十八世紀の中頃から起り，十九世紀初頭に於てその花を開いたのである．

この文学に於ける一般的傾向は，文芸批評に於てそのまま反映していると見ることが出来る．十八世紀中葉以前の Aristotle など古代の文学法則を重んじ，規範に合致する文学を以て優位な文学とする傾向は，十八世紀中葉以後急速に変化し，文学の自律を重んじ，自我の解放を尊び，独創を至上価値とする批評精神が力強く湧き起ったのである．

模倣の文学と独創の文学を対比し，後者の優位をはっきりと主張した人は *Conjectures on Original Composition* (1759) の著者 Edward Young であった．彼の論文は，*Sir Charles Grandison* の著者 Samuel Richardson に宛てて彼の小説を論じて書かれたものであるが，その中に於て，独創的精神の持主たる天才の精神は Elysium のように快く，Tempe の野のように肥沃であって，永遠の泉を味わうものであると述べ，その泉の源泉は至上の美を持つ花にたとえられるが，ただそれを模倣したものは育つのは早いが滅多に花は咲かぬものであると述べる．Young は Imitation に

は二種類あり，一つは自然の模倣，他は作家の模倣であり，自然の模倣が original であるという．そしてそれに対しては imitation なる語は用いず，ひたすら original というと述べる．このあたり，なお Aristotle の束縛から脱していないところがあるが，original を imitation と対立させているところに意味がある．又，彼は original の性質を述べて，

'An original may be said to be of a vegetable nature; it rises spontaneously from the vital root of genius; it grows, it is not made.'①

(「独創的作品は植物の性質を持つといえよう．それは天才の生気あふれる根から自然に生れる．それは成長するものであって作られるものではない．」)

といい，また，それに対立する模倣的作品については

'Imitations are often a sort of manufacture wrought up by those mechanics, art and labour, out of pre-existent materials not their own.'②

(「模倣的作品はしばしば，自分のものでない既存の材料から，技巧や骨折という技術によって作り上げられた一種の生産物である．」)

と述べ，また「独創的作品が新しくかつ優れたものであって，賞讃と共に驚異を加えるようなものであるならば，読者は作者の思いのままであって，作者の想像の強力な翼に乗せられて，イギリスからイタリヤへ，或る土地から他の土地へ，或る喜びから他の喜びへ運び去られるのである．」③

と述べるのである．かくして Young は独創精神の重要さを説くと共に，想像力の考を述べ，その力の偉大さを暗示しているのである．また，彼が天才の力を重視し，文学創造の豊かさは天才の心から生れると説いている点はたしかにローマン主義的である．天才という言葉は，Logan Pearsall Smith もはっきりいっているように④，ローマン主義精神と強く結びついているのであって，個人の独創的才能を強く認める精神に立脚していること

① *English Critical Essays*, XVI–XVIII C. p. 319.
後の Coleridge の説に類似する．
② Ibid.
③ Op. cit., p. 320.
④ *Words and Idioms*, London, 1948. p. 66 ff.

を知らねばならない.

かく独創を重んずる精神が詩人の側に於て特にはっきりと現われて来たということは興味のあることであるが，これはひとり Young のみに止まらなかった. William Blake などは特に独創精神を重んじ，想像力の重要さを主張した詩人であった. この偉大なる予言者の批評精神については述べるべきことが多く，Atkins や Wimsatt and Brooks などの批評史に取上げられていないのが不思議な位であるが，幸に Bowra 教授が名著 *The Romantic Imagination* に於て，Blake の Imagination 説を詳しく論じているのはわれわれに取って幸である. 私はこの際，詳細はこの Bowra の書にゆずり，ただ Blake が Imagination を独創的創造力の意味に用い，それを強調していることを述べて，十八世紀後半に於て Imagination 重視の傾向がはっきり現われて来たことの証差にしたいと思う. この独創を重んじ，想像力を重んずる思想は一つには文芸界一般の趨勢でもあったが，また同時に十八世紀から特に発達したヨーロッパ哲学思想の影響でもあったのである. 殊に想像力の思想的背景はこれをイギリスならびにドイツの哲学の流れに求めねばならないのである.①

第三章　想像力説の源流

前章に於て述べたようにイギリス十八世紀後半の文芸批評には次第に独創精神重視の思想が現われ，invention, originality, imagination, genius などの語が屢々用いられるに至ったのであるが，然し未だ想像力に関する確然たる思想は見られず，ローマン主義批評の根底をなすといってよい想像力説は未だ成立していなかったのである.

---

① Aristotle の模倣説はドイツやフランスでも可成り流布したと考えられる。フランスに於ては Charles Batteux の *Les Beaux Arts réduits à un même principe* (1747)，ドイツに於ては Lessing の *Laokoon* (1776) などはその影響の下に書かれた批評作品である.

しかるに近世に於ける文芸批評の歴史は，一面に於て哲学の歴史と呼応し，哲学の発達と共に発達したと見ることが出来る．近世に於ける哲学の歴史は，朝永三十郎がその名著「近世に於ける我の自覚史」(大正4) に於て述べているように自我の自覚の歴史であるということが出来るが，文芸批評の歴史もまた自我の自覚による独創精神の発見の歴史であり，想像力への自覚の歴史であるということが出来るのである．哲学に於ては Kant の批判哲学は主観が客観に依準するのではなく，客観が主観に依準し，主観が客観を可能にすることを説き，これを Copernicus 的転回と呼んだことは周知のところであるが，文芸批評に於ても，文芸作品は作家が外界を模倣することによって作り出されるのではなく，作家が自己の内部にあるものを表出することによって生れるものであるという考が生れ出たのである．これは正に哲学に於ける Copernicus 的転回に呼応するものであるといわねばならない．

かくして文芸批評の精神は哲学精神と密接に結びついているのであるが，殊に Coleridge に於て確立された想像力説は哲学思想と特に深く結びついているのである．想像力思想は英独の哲学思想を背景として成立しているといってよいのである．従ってこの想像力説の根底を深く掘り下げることは，文学者よりはむしろ哲学者の領分であり，哲学者にしてこの方面に関心をよせる人も少なくないのであって，わが国に於ては三木清の「想像力の論理」(昭和14年，23年)のような名著も出ておるのである．しかし文学者としても，いやしくも想像力説を論ずる以上，一応その哲学的背景を輪廓なりとも承知しておくことが必要であると思われるのである．

イギリスに於ける想像力の思想は一つは Bacon 以来のイギリス哲学の伝統の影響を受けており，一つには Kant, Schlegel などのドイツ哲学の影響の下にあるのである．先ずイギリス哲学の影響から考察して見よう．

さて英国哲学は Francis Bacon (1561–1626) を先達として発展したといってよいが，Bacon の経験論は知覚の優位を説き，想像力の意味につ

いては未だ充分な考察をなしていないが，然し知覚と共に想像力の存在を認め，その性質について若干の考察をなしている点に於て注目に価するのである．

Bacon 以後の英国哲学は Thomas Hobbes (1588–1679) を経て John Locke (1632–1704), George Berkeley (1685–1753), David Hume (1711–76) と発展するのであるが，これらの人々に於ては何れも知覚と認識の問題が中心となり，感覚を通して与えられたもの（印象）が如何にして観念となり，複合観念となるかの思索を中心とするものである．そしてこの観念成立の過程に於て想像力なるものが考えられているのである．今私はこれらの哲学者の諸説についてくわしく説くいとまはないが，そのうち最も重要な意味を持つと思われる Bacon と Hume の想像力思想について少し詳しく考察して見たいと思う．

Bacon はその名著 *The Advancement of Learning* (1605) の第二巻に於て，学問 (human learning) を，歴史，詩，哲学の三つとしたが，歴史は記憶に関する学問，詩は想像力に関するもの，哲学は理性に関する学問と考えたのである．J. E. Spingarn によれば，この三分法は[①]，Bacon より先に既に Spaniard Huarte によって *Examen de Ingenios*, 1575 の中に用いられ，後1594年 R. Carew によって英訳され，更に又 Charron なる人によって *De la Sagesse*, 1601 中にも用いられたとのことであるが，兎に角 Bacon はこの三分法によって，詩の性格を想像力によって特徴づけたのである．然らば Bacon はこの想像力なるものに如何なる意味を与えているのであろうか．

Bacon は同じ書物のうちで想像について，「[②]それは物質の法則に縛られず，自由自在に，自然が分離したものを結合し，自然が結合したものを分

① Introduction to *Critical Essays of the Seventeenth Century*. Oxford, 1908.

② *The Advancement of Learning*, Everyman's Edition, p. 82.

離する」能力であると述べ，従って，想像力の所産である詩は韻律の点以外は何をやってもよい．即ち，詩は現実の行為や事件よりも‘greater and more heroical’なものを工夫するものであり，従って詩は歴史よりもより自由で変化に富み，人間の心を満足させると説くのである．また詩はかようにして人間の寛大，道義，並びに喜びに役立ち，物を心に従わせることによって，人間の心を高揚し，それに神々しさ（divineness）を与えると考える．

以上の説明によって想像力なるものは物質の法則に支配されず，自由に心象なり概念なりを結合し，分離する能力であると考えられるが，それは他の精神能力と如何なる関係に立つであろうか．

Bacon によれば[①]，人間の精神能力には二つの範疇があり，一つは理性と悟性であり，も一つは意思，欲望，及び愛情である．前者は態度或は命令を生む合理的精神であり，後者は行動或は実行を生み出す道徳的精神である．ところが，想像力なる能力はその何れにも属しないが，何れもの代理者となり，その使者となる．また想像力は理性や悟性に先行し，意志に先行するのであって，想像力は常に自発的行動に先行する独立の能力であると考えるのである．

この考方は想像力に関しては未だ極めて不充分なものであるといわねばならぬが，想像力なるものを理性や意思と別個の能力としたところに意義があるといわねばならない．それは根本に於て結合の能力であるが，その背後に分離能力を含むものである．人が dragon や Pegasus を考え出すのは想像力の働きであるが，それはいくつかの動物の身体の部分を分離して，適当に結合することによって成り立つのである．

かように，想像力によって作り出されたものは，より偉大な，またより英雄的な行為や事件を生み出すということが出来る．歴史は普通の事件や

① *Ibid.*, p. 120.

行為を写し，従って平凡で変化に乏しいが，詩は思いがけぬ事件や行為を写す故に，新奇で変化に富み，人の心を充分に喜ばせることが出来ると考える．また，道徳的見地に立って云うならば，歴史は善行悪行に応じて必ずしも相当に報いられるとは限らぬ行為を描くが，詩は正しき因果応報を受ける行為を，また，より多く神の摂理にかなう行為を写すが故に，人間の道徳心の高揚に役立つのであり，更に進んでは，人間の心に神性をも与えようとするのである.[①]

かくして Bacon は詩の世界は現実の世界よりもより理想的であり，人は現実の世界にあきたらず，それをより理想的なものに変ずることによって，心に満足を与えようとすると考える．物の姿を心の欲求に従わせることによって心に満足を与えようとするのであって，物を心に従わせるということは，ただに心に満足を与えるばかりでなく，心を高揚し，正しくすることであり，心に神性を与えることであるというのである.[②] Bacon はかように詩の職能を高く評価しているのであるが，然し，Bacon の詩の理解は尚不充分な点を持つのである．それは詩を歴史や哲学に比して一段と低いものと考えたからである．歴史や哲学はものの真理を示すものであるけれども，詩はただ喜びを与えるものであるに過ぎないからである．「詩は想像力の喜び或は遊びであり」(Poetry is pleasure or play of imagination.[③]) 人間の真剣な仕事ではないと考える点は，我々の首肯し難いところである．

この詩そのものを軽視する考えは Bacon の詩の分類のうちにも見られる．Bacon は詩を分類して敍事詩 (poesy narrative)，表象詩 (poesy representative)，及び，引喩詩 (poesy allusive) とした．敍事詩とは歴史の誇張した模倣であって，普通に戦争や恋愛を主題とした詩であり，表象詩とは目に見える歴史，即ち過去の行為を目に見える形象によって表現したも

① Ibid., p. 82–83.

② Ibid., p. 83.

③ *The Advancement of Learning*, II, ii, 1. (Everyman, p. 121.)

の，即ち劇詩であり，また引喩詩とは或る特別の目的或は理念を表わすことを目的とした敍事詩であり，寓話であるとする．この最後のものは *Æsop* のような単なる寓話ばかりでなく，神話や Homer の詩のようなものをも含むのであり，Bacon が最も重視するものである．

Bacon がかような寓意詩を重視したのは，詩は詩そのもののためにあるのではなく，他のより偉大なもの，即ち真理や道徳のためにあると考えたためといい得るであろう．詩は，或る別の目的を持たねばならない．そうしてその目的をはっきり示すのでなければ詩の価値は薄いと考えるのである．そしてまたその詩が示す寓意が重要な意味を持つかどうかによってその詩の価値を定めようとした．Homer の詩の如きさえも，その寓話の意味が大した内面性を持たぬとして，それを余り高く評価しなかった事実がこれを証している[①]．これに反して Bacon は *Scripture* を非常に高く評価し，それを 'infinite spring and stream of doctrine[②]' であるといっているのである．かような次第であるから，純粋の抒情詩の如きは極めて価値の低いものと考えられたのであり，Bacon の文学観は必ずしも同意し難いものであるけれども，Bacon が想像力なるものを文学の原動力と考え，その構成的能力たることを認めた点に於て，彼の説は重視されなければならないのである．

次に David Hume について簡単に述べるが，彼は Hobbes, Locke, Berkeley などのイギリス近世哲学の集成者であり，十八世紀イギリス哲学の特色をその最も完成した形に於て示すものということが出来，従ってその影響も最も大であるということが出来よう．

Hume は初め *A Treatise of Human Nature* の Book I. *Of the Understanding*, Book II. *Of the Passions* (1749) に於て，人間の知覚 (Perception) の性質を明らかにし，Book III. *Of Morals* (1740) に於て彼の哲学

① Ibid., p. 84.
② Ibid., p. 218.

体系を示したが，後更にそれを再検討し，*An Enquiry concerning Human Understanding* (1748) として彼の体系を闡明した．後者は平明化されてはいるが，印象や観念の心理学的解明は簡単になり，従って想像力に関する部分は殆んど省略されているので，我々は主として前者によって想像力を中心とする彼の考えを考察して見ようと思う．

Hume は先ず人間の精神現象の総てを知覚といい，憎み，愛し，考え，感じ，見る総ての現象を指し，次にその知覚を印象 (Impression) と観念 (Idea) に分けた．印象とは感覚 (Sensation)，情緒 (Passion)，情感 (Emotion) など外界から直接与えられるものであり，観念とは，これらのものが思考や推理によって心に淡く浮び出た影像であるとした．即ち観念とは総て印象から模写されたものであり (all ideas are copy'd from impressions①)，第二次的なものと考えるのである．印象と観念との区別を「感じる」と「考える」との区別と考えれば大した違いはないが，特殊な場合，精神が何等かの激烈な情感に浸るような時には印象と観念とが近づいて区別出来なくなることがある．然し一般には印象と観念とは非常に違ったものであると考えてよいというのである．(Coleridge は *Biographia Literaria* に於て，impressions や ideas という言葉を用いた際，ideas を Hume の意味に取るのがイギリスの哲学者達の間に於て general currency であるからその意味に於て用いるとことわっている．Hume の考えの重要さを知るべきであろう②)．印象と観念との関係はかようであるが，その相異は本質的ではなく，ただその強さ (force and liveliness) によるのであって，力強く心に入って来るものが印象であり，その印象を基として，思考や推理によって力弱くかすかな心象 (faint images) を作るに過ぎないものが観念であるというのである．

また，印象と観念との関係はそれが単純である場合極めて密接であって，

① *A Treatise of Human Nature*, Oxford Edition, p. 163.
② *Biographia Literaria*, i. p. 69.

総ての単純観念はそれに応ずる単純印象を持ち，総ての単純印象はそれに応ずる単純観念を持つと考えられる．目を閉じて室の中を思い浮べる時作り出す観念は，目を開けて見ていて感じた印象の再現である．観念は印象の模写であるとの考えからは当然単純印象を経験せずしては如何なる観念も持ち得ないとの考えが出て来る．パインアプルの味を知らぬ者は，その味の観念を持つことは出来ないのである．かくして印象は常に観念に先行しなくてはならないとの考えは不動である．

かように Hume は観念と印象との相違を感覚的な強弱の程度によって区別したが，観念と観念，印象と印象の相違も同じように感覚的経験の強度によって説明している．Hume によれば，観念想起の方法には二種類あり，記憶 (Memory) によるものと想像力 (Imagination) によるものがこれである．記憶とはかって受け容れた印象を反復する機能であり，想像力とは同種の機能であるが，観念として思い起す点に於て異るのである．また，想像力は反復の仕方に於て異る．記憶は印象や単純観念をありのままに，即ちその順序や位置を変えることなく反復するに反して，想像力はあらゆる単純観念を好むままに分離し且つ接合するのである．想像力は観念を自由に変形したり，その位置を変えることが出来る．また，二つの観念を結合する能力も想像力の能力に外ならぬのである[①]．翼のある馬とか，火を吐く竜とか，化もののような巨人とかを考え出すのは想像力の働きに外ならぬのである．

かように想像力は観念を分離して，それを自由に違った秩序に再結合する能力であるが，その再結合を可能ならしめるものは連想の法則である[②]．そしてその連想の法則，或は連想を生み出す性質には，(1) 類似 (Resemblance)，(2) 時間的或は場所的な近接 (Contiguity in time and place)，(3)原因及び結果 (Cause and Effect) の三つがあると考えるのである．一

① Ibid., p. 10.
② この点 Coleridge の想像力の定義と関係が深い

枚の林檎の絵を見て，その絵のオリジナルである実際の林檎を思い浮べるのは「類似」の原理によるのであり，或る建物の一室の様子を見て他の室の様子を思い浮べるのは「近接」の原理によるのであり，傷を見て苦痛を思うのは「原因及び結果」の原理によるのである．これらの原理によってAからBを思い浮べるのが「連想」であり，それを可能にする力が想像力であるとするのである．

記憶と想像力については Part I, Section III に於て概説し，更に Part III, Section V に於てその本質的な点にふれている．ここに於て説くところは，記憶機能と想像機能は，何れも各自の単純観念を印象からとる点に於て一致し，前者が観念の原順序及び原位置の保存を特性とするに反し，後者は好むままに観念を置きかえたり，変化したりする点に於て相違するけれども，それは作用の区別であって，本質的な区別ではない．両者の相違は結局記憶が勢と活気（force and vivacity）に於て想像力に優るという点のみであるとする．従って信念（belief）や同意（assent）が働いて，想像観念が勢と活気を帯びる時は，それは屢々記憶観念として通用するのであり，この活気（vivacity）を以て記憶と想像力を区別するものと考えているのである．この点は同じ Part の Section IX の最後の脚註に於ても述べられているのである．

以上は Hume 哲学の根底をなす知覚，印象，観念，記憶及び想像力に関する概念であるが，Humeはこれらの概念を根底として，概念や知識の性質を検討し，更に人間の情緒や道徳の分析を行ったのであるが，その間に於ける想像力の役割は決して小なりということは出来ない．Humeに取っては精神活動の知的方面の総てを現わす知性（Understanding）は，理知（Reason）と情緒（Passion）の両面を含むが，想像力は理知のわくを超えて，観念を構成する働きをするのである．想像力にかような自由な構想的能力を与えたのは Hume の哲学の長所としなければならない．然しながら Hume はその構想的能力を観念の連合の作用と考え，その連合の

原理として七つの哲学的関係，即ち，類似，同一，時間及び場所の関係，量或は数，程度，反対，因果性を挙げるのであるが，そこにはイギリス経験論哲学の一般的特色である感覚主義が余りにも目立って，精神作用を量的に計算し解釈しようとする欠点があり，しかもただ客観的事実の解明のみに耽って，観念構成の根本に遡ろうとしないうらみがあり，知覚が一時取り去られるならば自己もまた同時に消失するという結果となり，心は単に知覚が通り抜ける階段に過ぎぬ状態となるのである．従って Hume の哲学は構成的意図を持ちながら，結果は懐疑的とならざるを得ないのである[①]．Coleridge らが，結局イギリスの伝統的哲学にあき足らず Kant や Schlegel などのドイツ哲学者に走ったのは実にかような客観主義の機械論的論法にあきたらなかったためと思われるのである．

然しながら Hume に於て到達された想像力の思想はイギリス哲学としては一つの窮極的な考えであって，これが後代のイギリス哲学者や思想家に影響を及ぼさぬ筈はないのである．Coleridge などローマン主義時代の文芸批評家達は先ず Hume などのイギリス哲学者の思想の検討から自己の哲学的立場を導き，更にドイツの理想主義哲学にその欠を補うに至ったことは注意すべきことであるといわねばならない．

次に我々はローマン主義の批評精神に特に大きな影響を与えた人として David Hartley を挙げねばならない．彼は Locke や Hume ほどの哲学者ではないが，Hume の association の考えを更に推進めて一つの連想心理学を確立した人であり，Godwin などの思想家に影響を与えたばかりでなく[②]，後 Wordsworth や Coleridge が殊にその心理学に興味を持った故に，その考えを明かにしておかねばならない．Hartley は 1749 年 *Observations on Man, his frame, his duty and his expectations*, 2 vols を

① この結論は W. R. Sorley: *A History of English Philosophy* の所論に負うている．(Cf. p. 179)

② Godwin: *Political Justice* 1793. Bk. IV. Chap. VII. は 'Of the Mechanism of the Human Mind' という表題を持ち，Hartley の考を敷衍している．

著し，その著は十八世紀に二三度再版され，又 Priestley による抜萃本も1775年に出版されて，可成りの読者を得た模様である．その本質は Coleridge が *Biographia Literaria* 第七章に於ていっているように‘association psychology’であるが，その大要を示せば凡そ次のようである．

Hartley によれば，我々の知識は感覚（sensation）或は外部からの印象（impression ab extra）を連想（association）なる能力によって結合することによって得られる．それらの感覚や印象は或る物質的な現象，即ちエーテルの震動であって，知的交流（ intellectual intercourse or intercommunion）によって結合する．又，その知的交流というのは物質の延長（extension），動き motion），速度（degrees of velocity）の結合であり，それによって概念（notion）が得られるのである．我々が愛を感じ，又，聖なるものを感じるのは，我々が或る種のエーテルの動きを左様なものと感じるに過ぎないのである．即ち Hartley の考えは根本に於ては物質主義感覚主義であるが，感覚或は印象が連想の原理によって結合して知識となる点に於て Hume の哲学と共通なものを持ち，イギリス経験論哲学の伝統の上に立つものであるが，ただその連想なるものの考えは未だ不充分であって，それを主観の持つ高度な構成的能力として把握することなく，色々の部分が同時性（contemporaneity）の原理によって，全体（all）と共存（co-present）の状態になると考えるにすぎないのである．即ち，Hartley は観念の構成を同時性という自主性のない原理によって解釈し，想像力というものも単なる観念の共存をうながす連想作用に過ぎないと考えたのである．この点に関して Hartley が述べた言葉を引用するならば，

‘The recurrence of ideas, especially visible and audible ones, in a vivid manner, but without any regard to the order observed in past facts is ascribed to the power of Imagination and Fancy.’①

（「明瞭に，しかし過去の事実に於て観察された秩序に何等関係なく，観念，殊に

① Op. cit., 1st Part, Chap. III, Sect. V, p. 383.

視覚聴覚の観念を再現することは，想像力や空想力に帰せられるのである.」)

かくして Hartley に取っては，想像力は認識や思考の媒介者であり，中間に立つ力（intermediate power）であって，結局これは Locke や Hume の経験論哲学の上に立つ機械論的物質主義の思想であるといわねばならない．従ってこれは，人間の心というものの働きに興味を持った十八世紀の人々の興味を一時つなぎ取めることが出来たが，独創的精神を持つ人々からはやがて見捨てられる運命となったのである．Wordsworth や Coleridge も一時この哲学に傾倒したが，間もなくその機械論的物質主義にあきたらなくなり，主観の力を更に強く認識し，自我の能動性を主張する Kant などのドイツ哲学に転ずるに至ったのである．それは兎に角として，Hartley は観念連合の力として想像力なるものの存在を認めた点に於て後代の想像力説に一掬の寄与をなしたものということが出来る．

以上によって私は Bacon 以後のイギリス経験論哲学が想像力を如何に考え，それを如何なる能力と考えたかを瞥見したが，兎に角我々はイギリス哲学に於ては，何れの哲学者も，感覚や印象の結合能力として想像力なるものを認め，その働きによって観念が構成され，複雑な思考がなされ，精神活動が達成されると考える点に於て，軌を一にするということが出来，それがたとえ経験論的であり，又，機械論的であるとはいえ，一種の構成能力と考える点に於て，重要な意味を持ち，文芸に於ける想像力説に大きな寄与をなしたことは否定することは出来ないのである．人間の精神作用についての深い考察の上に立つ文芸批評の精神が，哲学や心理学にその拠り所を見出すのは極めて自然なことであるといわねばならない．

次に私は先に述べたように想像力説の形成に大きな寄与をなした Kant, Schelling, Schlegel などのドイツ哲学に言及しなければならないのであるが，これは私が Bacon, Hume, Hartley 等の解説に於てなしたようにその原典から説き及ぶことはその任でもなく，また本稿の目的を逸脱するおそれもあるので，イギリスに於ける想像力説の形成者なる Coleridge の解

説に於て，主として Coleridge 関係の書物をたよりにしながら，想像力説への影響者としてのドイツ哲学に言及するに止めたいと思う． Coleridge の批評精神の解説者のうちには，ドイツ哲学の造詣が深く，巧みにその真意を把握して，Coleridge への影響を説く優れた学者が少くないからである．*Biographia Literaria*, 1907の編者にして詳細なる註解者なる G. Shawcross を初めとして，*Coleridge as Philosopher*, 1930 の著者にして優れた哲学者であった J. H. Muirhead, *Kant in England*, 1931 や *A History of Modern Criticism, 1950–1950*, 1955 の著者 René Wellek, *Coleridge und die Kantische Philosophie*, 1933 の著者なる E. Winkelmann などがこれである．

第二篇　想像力説の確立者コールリッジの思想と学説

第一章　コールリッジの思想形成

第一篇に於て述べたようにイギリス文芸批評に於て一つの重要なる指導概念として発展し来った想像力に関する思想は，十八世紀末に至って，次第に明瞭な理念に発展したが，その前時代の理念を更に固定し発展させ，一つの特色ある理念に形成したのが S. T. Coleridge (1772–1834) であるが，その思想の全貌を示すに先立って，Coleridge の思想を培った彼の知的環境 (intellectual milieu) について語り，その思想の背景を明らかにしておきたい．

Coleridge の父 John は教区牧師であると共に King's School なる Free Grammar School の校長であり，Greek, Latin, Hebrew に通じ，*A Critical Latin Grammar* なる Latin 文法の書物を著わしている位であるから，語学や文学に可成りの造詣があったものといってよかろう．その感化を受けて子 Samuel は幼にして読書を好み，十二三歳のころには既に学友 Lamb をして Coleridge を 'Logician, Metaphysician, Bard![1]' と呼ばせたことは有名な話である．Lamb は Christ's Hospital の廊下で Coleridge が Jamblicus や Plotinus を声高く読んでいるのを聞いたと語っている[2]．Jamblicus というのは紀元4世紀の Neo-Platonist であり，Plotinus は紀元三世紀のこれも有名な Neo-Platonist であり *Enneads* の著者であるが，何れも Plato より発し，Aristotle や Stoicism の思想を包含することによってギリシヤ哲学を概括的に統合した一派であり，絶対者の概念を中心概念として，それより世界を概念的に導き，一は多に先立

---

① Lamb: *Essays of Elia*, 'Christ's Hospital Five-and-thirty Years Ago'
② Ibid.

ち，神は何物にも優る絶対的実在であると考える思弁哲学であり，一元論的汎神論であり，ヨーロッパ的精神主義の祖でもある．かような大哲学の哲理が十五歳の少年に理解し得たかどうかは容易に断じ難いが，Coleridge はそういった類の哲学に早くから没頭していたのである．

Coleridge が Plotinus を好んで読んだことは，彼自身 *Biographia Literaria* の中で屢々言及するところである[①]．また，1814 年に書かれた Coleridge の論文 'the Essays on the Principles of Genial Criticism' (Shawcross はこれを *Biographia Literaria* に包含させている）には二箇所に亘って Plotinus の *Enneads* の長い引用がなされ，美の概念の説明に役立てている．また，その一つの引用は *Biographia Literaria* 本文にも引用されているのであるから，Coleridge の Plotinus 重視の程が知られる．実際 Plotinus が Coleridge に及ぼした影響は決して軽視することが出来ぬのであって，多くの学者は Plotinus の影響を相当に重視しているのである．*The Sacred River* の著者 G. V. Baker は Plotinus の認識論が Coleriege の primary imagination の考に基礎を与えたものだといい[②]，また *Coleridge on Imagination* の著者 I. A. Richards は *Enneads* V, viii, 1 を引用して Plotinus の imagination の説を紹介し，その考えが確かに Coleridge の想像力説の起源の一つであると述べているのである[③]．思うに Plotinus は，認識を単なる感覚的受容と考えるのではなく，感覚的に受け容れたものを選択によって能動的積極的に統一することであると考えたのであって[④]，perception を一種の creation と考えるところに Coleridge の独創精神に呼応するものがあるのである．Coleridge の想像力説の起源を Plotinus に求めるのもこの意味に於てである．

勿論 Coleridge の読書は Plotinus や Jamblicus のみに限られたわけ

① *Biographia Literaria*, Shawcross Edition, i, p. 80. 166, 266, 268, ii, 239, etc.
② Baker, op. cit., p. 68.
③ Richards, op. cit., pp. 26–7.
④ Cf. *Enneads*, IV, vi, 2; V, v, 8; V, viii, 1, etc.

ではない．彼は Christ Hospital の校長 Rev. James Bowyer によってみっちり古典語を仕込まれ，ギリシヤ，ラテンの主な作家を読破したが，その間に，「Cicero よりは Demosthenes を，Virgil よりは Homer や Theocritus を，また Ovid よりは Virgil を選ぶ趣味を形成していた[①]」のである．また，ギリシヤ悲劇詩人と共に Shakespeare や Milton をも愛読し，これらは彼の文学精神の基本を形造った．更に Bowles の *Sonnets* や Ossian の詩，Darwin の *Botanic Garden*, Percy の *Reliques* など当代の新しい息吹をもふんだんに吸い込み，いわゆる Romanticism の覚醒に入っていったのである．この Romanticism の精神は根本に於て自我の自覚に立脚するものであり，自我の主張に他ならぬ独創的精神を重んずることはいうまでもないのであって，この精神が基本的に Coleridge の想像力の思想を導いたといってもよいのである．

Coleridge の哲学熱は一時脱線して Voltaire の *Philosophical Dictionary* などに走ったが，しかしやがて Bowyer 先生の注意によって，イギリス経験論哲学の本道に引戻されたのである[②]．このことは，1794年彼が Cambridge 大学に在学していた時長兄 George に送った手紙の中で，そのころ彼が Locke や Hartley などの哲学を熱心に研究していると述べていることによって明らかである[③]．Coleridge の Hartley への傾倒は正に極端といってよいほどであって，上の手紙のうちで，Locke や Hartley の哲学は「この上ない英知を以て人間の性質について述べられており[④]」，自分はそこに於て「世界が到達し得る最高の完全（the point of possible perfection）を見るように思われる[⑤]」と云っているのである．それから約一年後 Robert Southey に宛てた手紙の中でも，「自分は完全な必然論者

① *Biographia Literaria*, i, p. 4.
② Gillman: *Life of Coleridge*, p. 23.
③ Griggs: *Collected Letters*, p. 126.
④ Ibid.
⑤ Ibid.

(Necessitarian) であるが，その問題を Hartley 流に理解し，更に Hartley を超えて思想の有形性 (the corporeality of thought) を信じる」と述べているのである[①]．同じ年 Christmas Eve に筆を取り，1796年に完成した 'Religious Musings' が Hartley 哲学の影響下に書かれたことは，Hartley 哲学を一読した者には容易に認め得ることである．その同じ1796年9月 Coleridge の長男が生れたが，彼はその子に彼の敬愛する偉大なるキリスト教哲学者にして「人類のうち最も賢明なる人」(the wisest of mortal kind[②]) Hartley の名を与えたのである．

勿論 Coleridge は Locke, Hume, Hartley などのイギリス哲学はいうまでもなく，Aristotle や Plato さてに又 Neo-Platonists や St. Thomas Aquinas, Des Cartes などの哲学にも親しんだことは，*Biographia Literaria* 第五章以下に明らかであるが，しかし Coleridge に取って Hartleyこそは最も親しい哲学者であり，彼以前の総ての哲学は Hartley に於て結集し，それらの最も高貴なるものが Hartley 哲学のうちに見られると考えられたのである．晩年に至るまでこの考えがつづいたわけではないが，1816年に書かれた *Biographia Literaria* に於てさえ，Hartley 哲学に関する記事が三章に亙って詳述されていることを考えれば，Coleridge の Hartley 哲学への執着は可成り根深いものであったと考えられる．

さて Hartley 哲学については前篇に於てその概要を説明したが，要するに彼の哲学の本質は Coleridge が *Biographia Literaria* 第七章に於て見事に道破しているように，連想心理学 (association psychology) であるが，然しそれは今日の心理学，殊に実験心理学などとは凡そかけはなれたものである．それは連想心理学的方法によって認識，理念，理解，愛情，記憶，想像などの現象を解釈し，更に進んで，神の愛，神の畏怖等を論じ，キリスト教の真理，生命の原理を論じると共に，人類への大いなる期待を

① Griggs, p. 137.
② 'Religious Musings' 368, 369.

披瀝するという，広汎な哲学であり，この書物の全体に一応目を通すならば，Coleridge がこの書物に魅力を感じた所以もわかるのである．この書物から Coleridge が学び取ったことは数多いが，想像力に関することのみに限定して考えれば，Coleridge が Hartley の連想能力 association なるものを認識の根本的能力と考えたという点が特に注意されねばならない．知識は外的印象（impression ab extra）が連想能力によって結合せしめられたものにすぎないと考えるのであるが，外的印象は一種のエーテルの作用によって得られると考えるところに Hartley 哲学の物質主義があるのであり，そこに彼の欠陥があるのであるが，兎に角，連想作用によって観念や知識が成立すると考える点は一つの心理学的認識論であるといわねばならない．その連想作用は同時性（contemporaneity），因果（cause and effect）及び連続（continuity）の原理に基いて行なわれ，部分と全体が，同時的存在（co-presence）の状態になることによって成立すると考える．同時性，因果，及び連続は，連想作用を支える法則であり，二つ以上のものが一つに結合するための条件でもある．そして諸々の連想作用を調停し媒介する中間の力（intermediate power）が存在するが，その中間の力が想像力であると考えるのである．この考えには Coleridge の想像力の考えと共通するものがあるように思われ，従って Coleridge の想像力説への Hartley の影響が考えられるのである．

Coleridge が Kant の存在を初めて知ったのは1796年ころと考えられ，同年5月5日 Thomas Poole 宛の手紙には既にその偉大なる哲学者の作品を得るためにドイツに渡りたいとの希望が述べられているのである．[①] 同年12月友人 Thelwall に送った手紙に‘the most unintelligible Immanuel Kant’[②] なる言葉が見られるので，そのころ Coleridge は Kant を苦心して読んでいたことがわかるのである．Coleridge が Kant を理解し得なか

① Griggs, i, p. 209.
② Ibid., i, p. 284.

った理由の一つは彼のドイツ語の学力が足らなかったせいもあった．それ故彼は1797年熱心にドイツ語を勉強し始めた．彼のドイツ行の目的の一つはそのドイツ語の修得にあったことは，彼自身 *Biographia Literaria* に於て述べている通りである[①]．

Coleridge が Göttingen 大学に於て Kant を学んだか否かは詳かにし難い．Schneider 女史はかって Coleridge が Göttingen 大学に於て借覧した書物の list を発表したことがあるが[②]，そこには Hans Sachs, Lessing, Michaelis などの名はあるが Kant の名は見当らない．Brandl によれば，Coleridge が Göttingen に在学した時代には，Bouterwek なる若い教授が Kant 哲学を講じて居り[③]，Kant に興味を持つ程の者はこれを聞かぬ筈はないと思われるが，Coleridge がそれを聞いた証左はない．然し彼が帰朝するに際しては Kant の著作集を荷物のうちに加えることは忘れなかったのである[④]．かくして1801年ころ Kant は Coleridge をあたかも「巨人の手を以て」つかむかのようにしっかりと捕え，15年後に於ても尚減ずることのないよろこびを以て[⑤]，その作品を読みつづけさせたのである．然らば Coleridge は Kant から何を学び取ったのであろうか．

Coleridge は幼にして Plotinus や Jamblicus などの神秘主義の Neo-Platonism の著作を読んで哲学の世界に入ったのであるが，やがて Locke, Hume, Hartley などイギリスの正統派の経験論哲学に転じ，殊に Hartley 哲学に心酔したことは既に述べたが，Kant 哲学に接するに及んで，そのイギリス経験論哲学の欠陥を感じ，一面的な客観主義哲学を新たに見直し，主観客観合一の本義をさとり，認識の真の意味を解するに至ったといってよかろう．Coleridge は Kant によって文字通り Copernicus 的転

① Op. cit., i, p. 138.
② *Modern Philology*, vol. XXV, 3 (Feb. 1928)
③ Brandl: *S. T. Coleridge*, p. 256.
④ Cf. Griggs, ii, p. 368, 768.
⑤ *Biographia Literaria*, i, p. 99.

回をなしたということが出来るのである．そして主観の働らきである理性，悟性，想像力などの働らきを深く検討するに至ったことはいうまでもないのである．

次に Coleridge の想像力説に関連する限りに於て Kant 哲学の要点をさぐって見よう．Kant に取って，理性（Vernunft, Reason）と悟性（Verstand, Understanding）の問題は哲学的思考の根本問題であった．彼によれば，悟性とは観念の能力（das Vermögen der Begriffe）であって，感覚によって受け容れられたものによって対象を作り出す統一的概念的な能力であり，認識の根底をなす能力である．理性は理念の能力（das Vermögen der Ideen）であって，悟性によって構成された観念を更に体系的に一段高次な理念（Idee, Idea）に形成する能力である．われわれは感覚を通して対象を直観するが，その対象を受け取る能力が感性（Sinnlichkeit, Sensibility）であり，与えられた素材（Stoff）を秩序づけるのが悟性である．その場合我々の認識は感性と悟性によって成立するのである．

「感性なしには如何なる対象も我々に与えられず，悟性なしには如何なる対象も思惟せられぬであろう．内容なき思考は空虚である，概念なき直観は盲目である[①]」

と Kant は述べている．一般に悟性は判断の能力であり，判断に於ける統一の機能でもある．この綜合能力はいわゆる統覚（Apperzeption）であって悟性統覚は「我あり」の意識であり，又「我考う」の意識であるから，認識の最も重要な働きは悟性によってなされる．

「一般的にいえば，悟性とは認識の能力である．認識とは所与表象の客観に対する一定の関係である．そして客観とは，その概念に於て，所与直観の多様が結合されているところのものである[②]」

---

① Kant: *Kritique der reinen Vernunft*, 2te Ausgabe, S. 75.
天野貞祐「純粋理性批判」上，161頁による．

② 上述書上，233頁．

と Kant はいうのである．然し悟性はかように自然認識に於て重要な働きをするけれども，それはあくまで対象に向けられた理性に過ぎない．それは自然の形式的統一の源泉であり，自然の立法者であるけれども，それは理性の一面であるに過ぎない．この故に窮極的統一者として更に一段と高次な理性が存せねばならないのである．Kant は

「凡て我々の認識は感能から始まり，悟性に至り，理性に終る．理性以上に直観の素材を処理して思惟の最高統一の下に入れるところの一層高次の認識能力というものは存しない[①]」

と述べて理性の位置を明らかにし，又，理性は直接に経験或は対象に関係せず，悟性に関係するとし (359)，理性が高次なる認識能力であることを説いている．

かくして悟性によって得られるものは Notio であり，理性によって得られるものは Idee である．Idee は超経験的であって，一切の経験の限界を超越する (384)．すなわちそれは先験的理念である．悟性が自然から認識し得ることは，何であるか，何であったか，何であるであろうか，ということだけであって，何であらねばならぬかということではない．総ての時間関係とはなれて当為の観念を与えるものは悟性ではなくして，理性であるとするのである．かくて Kant 哲学は認識問題に於て，理性と悟性を根幹として成立するものといわねばならない．Coleridge はこの点に着目し，Reason と Understanding の問題を最も重要なる哲学の根本問題と考え，常にこれに言及したが，これは正に Kant 哲学の教えに従ったものである[②]．

尤も Coleridge の考は Kant の考えの直訳というわけではない．殊に晩年の著作に於ては，Coleridge 独自の考えが成立し，Kant よりはより具体

---

① Ibid., S. 355. 天野上述書，下，8頁．

② Coleridge に於ける Reason と Understanding については加藤竜太郎氏の「コウルリジの文学論」に好論文がある．同著107—152頁。

的，経験論的になっていると思われる．然しその思想の起源は Kant に発することは明らかであり，大筋は Kant と異なるものではない．Coleridge は *Aids to Reflection* (1825) や *The Friend* (1818) 第一部などに於て Reason と Understanding 論を述べているが，後者によって Coleridge の思想の大要を略述しておきたい．

Coleridge は先ず understanding を以て感覚を通しての外界認識の能力と考え，外的経験の規則を包含し，その可能性を構成する能力であると考えて次のように定義している．

> (Understanding means) the conception of the sensuous, or the faculty by which we generalize and arrange the phenomena of perception: the faculty, the functions of which contain the rules and constitute the possibility of outward experience.①
>
> 「(悟性とは) 感覚的なものの受容力，或は，我々が，認識現象を一般化し，調整する能力，即ち，悟性の能力及び機能は外的経験の規則を包含すると共にその可能性を構成するものである．」

これに対応する理性は，内面的感覚の機関であり，精神的対象を認識する機能である．Coleridge は reason を次のように定義している．

> (Reason is) an organ of inward sense, and therefore the power of acquainting itself with invisible realities or spiritual objects.②
>
> 「(理性とは) 内面感覚の機関であり，その故に，目に見えぬ現実，或は精神的対象を知る力である」

更に Coleridge は悟性と経験とは理性なくして存在するが，理性は悟性なしには存在しないと述べている．これは Kant の考えと全く同一であるということが出来よう．

また，更に Coleridge は同じ論文の他の部分に於て，悟性と理性を次のように説明しているが，ここに於ても，Coleridge は明らかに Kant の考

---

① *The Friend* (Bohn's Library), p. 102. (I, Essay V.)
② Ibid.

えを祖述しているといわねばなるまい.

By the understanding, I mean the faculty of thinking and forming judgements on the notices furnished by the sense, according to certain rules existing in itself, which rules constitute its distinct nature. By the pure reason, I mean the power by which we become possessed of principles (the eternal verities of Plato and Descartes), and of ideas.[①]

(「悟性によって私は感覚によって与えられた知識に基いて考えたり判断を構成したりする能力を意味するが, その場合悟性は自己自身のうちに存する或る規則に従うものであり, その規則は悟性の独特の性質を構成するものである. 純粋理性によって私の意味するのは, 原理(プラトンやデカルトのいう永遠の真理)と理念を把握し得る能力である.」)

かように Coleridge は Kant に従って理性と悟性を理解し, その両者を人間に於ける認識能力の根本であると考え, 殊に理性を以て最も高度なる精神能力とし, 人間のみの持つ, 最も人間らしき能力であり, 人間特有の道徳や宗教などの高邁な思想感情は理性を根底としてのみ成立し得るものと考えたのである.[②]

以上は Kant の理性と悟性の考えの Coleridge に及ぼした影響を主として考察したのであるが, これは Coleridge の想像力説の根底をなすものと考えることは一応の定説と云ってよかろう. Coleridge に於ける Kantの影響を過大に評価することを戒め, 反ってイギリスの Combridge Platonist の影響などを重視する人もないではない (O. Lovejoy, Claude Howard などを挙げねばならない[③]). それにしても Coleridge の想像力説に於ける Kant の影響は否定すべくもない.

以上によって Coleridge の想像力説の基本をなす認識論殊に理性と悟性の問題に於ける Kant 哲学の影響を考えたが, 然らば Kant は想像力なるものについて如何なる考えを持ったであろうか. そしてそれは Coleridge

① Ibid., p. 118.
② Ibid., p. 127. Cf. B. L. p. 250.
③ なおこの点については加藤竜太郎氏「コウルリジの文学論」153—78頁参照.

と如何なる関係にあるのであろうか.

Kant の想像力の考えは容易に明らかにし難いが，具体的認識能力の一つと考えたことは明らかであり，「純粋理性批判」にも「判断力批判」にもその点に関する記述を見出すのである.「純粋理性批判」に於て Kant は想像力 (Einbildungskraft) を以て範疇能力と直観能力の中間に位するものとし，経験的感性的直観を範疇のもとに包摂する働らきをなすものと考えた. それは感性によって得られたものを図式によって媒介することによって形像として把握するものである. 直観によって受取られた概念を投影することによって，具体的な形像を作り出す働らきである. たとえば直観によって得られた三角形は直角三角形であっても斜角三角形であってもかまわず，ただ三角形であればよいのであって，それは概念的なものに過ぎないのであるが，想像力によって把握された三角形は或る特定の形像 (Bild) を持つ具体的な姿でなければならない.「判断力批判」に於ては想像力は「現実の自然が与えるところの素材によって，いわば或る他の自然を作り出す力である[①]」と説明され，想像力は現実の自然を修飾し，作りかえる力であると考えられた.「純粋理性批判」に用いられた言葉を用いるならば，想像力は現実の経験によって得られた素材によって新しい形象を形造る能力であるといい得るであろう. また Kant が「人間学」に於て述べるところによれば，認識能力に於ける感性は，感覚と想像力なる二つの部分を含み，「前者は対象の現存に於ける直観の能力であり，後者は対象が現存しなくても直観する能力である[②]」. 想像力の性質を明確に定義した言葉といわねばなるまい. 更に同書に於て Kant は想像力を生産的 (produktiv) と再生産的 (reproduktiv) に分ち，前者は新しい形象を生み出す創作的想像であるに反して，後者は単に過去の経験を再生するに過ぎぬ働き，即ち記憶に過ぎないとしている. 想像力は新しい形像を創造するという考えは「判

① *Kritik der Urteilskraft* §49.
② *Anthropologie*, §15

断力批判」に見られたものと異らない．Kant はこれを直ちに，文芸批評に結びつけて考えることはなかったが，想像力の根本性質については適確な考えを持っていたといわねばならない．

Coleridge の想像力説がこの Kant の想像力の思想に影響されたことは容易に察し得るが，我々は先ず Coleridge の想像力説の真意を窺うことにしよう．

第二章　コールリッジの想像力説

以上の諸章に於てイギリス文芸批評史に於て想像力なるものを批評の基準と考える思想が如何に発展したかを述べた後，この思想が最も完成された形に於て一応のまとまりを得たのを Coleridge の批評と考え，その前提の下にその Coleridge の思想の背景をなすと考えられる諸思想を検討して来たのであるが，いよいよ本章に於て Coleridge の想像力説の詳細を説明し，その全貌を窺って見ようと思う．

さて Coleridge の想像力説といっても，彼自身がこれを一つの学説として系統的に祖述しているのではなく，彼の心の底に文芸批評の原理として想像力に関する思想があり，それを折にふれて論じ，また，それに基いて論を進めたというに過ぎないのである．それらの思想ないし論述は *Biographia Literaria*, *Lectures on Shakespeare*, *Table Talk* 其他に散見されるのであるが，その最もまとまった論旨を見るのは *Biographia Literaria* 第13章に於てである．

これも決して行届いた説明というのではなく，簡略に彼の思想の大要を要約したものに過ぎないのであるが，その一語一語に深い意味が含まれ極めて意義深い定義をなしているのである．ここに於て Coleridge は先ず想像力なるものを第一の想像力（Primary Imagination）と第二の想像力（Secondary Imagination）に分ち，先ず前者を定義して次のように述べる．

'The primary Imagination I hold to be the living Power and prime Agent

of all human Perception, and as a repetition in the finite mind of the eternal act of creation in the infinite I AM'[1]

(「第一の想像力を私は，人間の知覚全体によって働く生命力であり，その主たる行為者であり，又，無限なる神に内在する永遠の創造活動が，有限な心のうちに反復するものだと考える.」)

すなわちこの第一想像力は全く哲学的な認識論的な意味に用いられていることがわかる．この想像力は all human perception の働きであるというのであるが，この all human perception という意味をはっきり把握しなければその真意はわからない．この perception という言葉は Hume などの用いた広い意味に取るのが妥当であると考えられ，「見たり，感じたり，考えたり，愛したり，憎んだり」する総ての心の働きと見てよいであろう．印象や理念を得る意識の作用が即ち知覚である[2]．従ってこの場合知覚即認識と考えることも出来る．それでこの定義の前半に於て Coleridge は想像力とは，人間の知覚全体によって働く生きた精神力であるといっているのである．特に生きた力，即ち the living Power といっているのは Coleridge としては意味深長なのであって，imagination という主観の能力は客観世界のように死んだものではなく生きて働く生命力であるというのである．それから又想像力を以て人間の知覚全体の主たる行為者であるというのは，想像力こそ知覚の根本的な作用者であり，その代表者であるというのであって理性や悟性よりも更に第一義的なものであるというのである．即ち想像力は，感覚によって得た資料を統一して，組織し，構成する第一の力であって，理性や悟性のような第二義的なものではないと考えるのである．想像力は理性や悟性よりも人間の知覚に於て一層根源的であり，一層先駆的であるというのである．

次にこの定義の後半に the infinite I AM という不可解な言葉が出ているが，この言葉の意味は今日まで余り深く注意されず，単なる自我と解さ

① *Biographia Literaria* i, p. 202.
② Cf. Hume: *A Treatise of Human Nature,* Bk I, Of the Understanding.

れたりしている．このＩ AM は Exodus iii, 14 に‘And God said unto Moses, I AM THAT I AM: and he said, shalt thou say unto the children of Israel, I AM hath sent me unto you.’とあるＩ AM に他ならぬのである．そしてこのＩ AM は神学上問題の個所であって，ただ「有りて在る者」或は「有って有る者」と訳しただけでは意味は明らかではない．このＩ AM は *The Vulgate* の Ego sum qui sum の qui sum 或は qui est であり，*The Septuagint* の *'Εγώ εἰμι ὁ ὤν* の *ὁ ὤν* であって，神は自らを「ホ・オーン」と呼ばれたのであり，ヘブライ語では 'ehyeh 即ちハーヤー（hāyāh）の一人称単数未完了形であり，「私があるところのもの」の意である．この点について筆者はわが国神学の権威有賀鉄太郎氏に負うのであるが，[1] 兎に角このＩ AM は「最高の有」なる神，‘ipsum esse’「有自体」なる神の意であることは明らかであり，N. E. D. をひいて見ると‘the Lord Jehovah’或いは‘the Self-existent’と出ている．[2] Coleridge がこういった聖書の知識を背景としてこの言葉を用いていることは，そのＩ AM に infinite という神の属性を示すに最適の形容詞を用いていることによっても明らかである．それだけではない．彼は *Biographia Literaria* の他の個所に於てこのＩ AM の意味を説明しているのである．即ち同書第12章に於て，「もしわれわれが，われわれの考えを絶対的存在，即ち偉大なる永遠の有に至らせるならば，存在の原理，智識，理念，実在の原理，存在の根拠，存在の知識の根拠は，絶対に同一のものとなり，『われあるが故にわれあり』となる．自己の存在を自ら確認するが故に，自分はあるのであり，われがあるが故に，われは自ら存在すると確認するのである．」[3]

---

① 特に有賀鉄太郎：「有とハーヤー」「基督教研究」30巻1・2号（昭和32. 7. 1）

② Jehovah の意味は今日ヘブライ語 hāwāh (to be, to exist) の derivative と考えられ，‘that is’, ‘the sef-existent’或は‘the one ever coming into manifestation’の意と考えられていることは云うまでもない．他に依存せずしてそれ自身存在する全能の神の意である．

③ *Biographia Literaria* i, p. 183.

といい更に，「エホバは自己の絶対的存在を最初に啓示するに際して，同時に総ての哲学の根本的真理を啓示し給うた[①]」と述べているのである．すなわち Coleridge は存在や認識の問題を考える場合，自己と共にその背後にある無限なる神エホバを常に念頭においていたということが出来るのである．即ち Coleridge に於ては認識は常に神と共に考えられていたといってよかろう．彼に於ては 'sum quia Deus est' であり，'sum quia in Deo sum' なのであり[②]，imagination 即ち 'the vision and the Faculty Divine[③]' なのである．

かように Coleridge の認識主体としての I AM なる語は古くヘブライ語の hāyāh に起因する有概念を基底として成立つ，いわゆる ontologia に対立する hayathologia 的神の意であると考えられるのであり，この故にその I AM は一面に於て認識主体たる self ないし self-consciousness の意を含むと同時に絶対無限なる spirit ないし Deus 的性格を持つのであり，存在の原理であると共に，知識の原理でもあり，また，存在と知識の合一でもあるのである．それが living であると共に，'eternal act of creation' の主体ともなり得る所以なのである．

さてこの定義の後半に於て述べることは，想像力なるものは，無限なる神の持つ永遠の創造的行為を有限なるわれわれ人間の心の中にくり返すところのものであるというのであり，ここに神の属性なる 'infinite' と人間の属性なる 'finite' を対照させている点が注意されると同時に，Jehovah の本質を creation と見て，その働きが人間に現われたものが想像力だと考える点が明らかにされているということが出来る．即ち人間の創造作用は神の創造作用の現われであると見ているのである．これは別に珍らしい考えではないが，今日の我々のように総てを個別的に考える者に取っては，

① Ibid.
② Ibid.
③ Ibid., ii, 45.

認識や芸術に於ける創造と神の創造を同一の根源と見なす考えはやや当を得ていないもののように思われる．然し Coleridge のように総てを綜合的統一的に考えようとする人に取っては，総てを或る絶対的な無限な生命力ないし存在の働きに集約して考えることは極めて自然なことであったのである．こういった考えの起源を或は Bible に，或は Plotinus などの Christian Platonism に，或は Jacob Boehme に求めたりする学者の説は今問題にするいとまはない.[①]

結局 Coleridge が第一の想像力として意味するものは，それが人間の知覚ないし認識の原動力であり，その主たる行為者であるということと，それが万能な神の創造活動の現われであるということである．ここで問題となるのは，人間の知覚ないし認識の働きと，創造活動とは如何なる関係に立つかということである．即ち知覚即創造作用なのか，創造作用は知覚の上にあるものかということである．この点に関しては異論もあるであろうが，もしわれわれが知覚を広義に解し，認識と同義に解するならば，知覚の作用はそのうちに創造作用を含むものといってよいであろう．即ち認識なる精神作用はそのうちに受動的な働きと共に能動的な働きを持ち，綜合的，統一的，構成的な働きを持たねばならないからである．以上によって第一の想像力の意味が明らかになったと考える.

次に第二の想像力であるが，Coleridge はこれを次のように定義している.

The secondary Imagination I consider as an echo of the former, co-exiting with the conscious will, yet still as identical with the primary in the *kind* of its agency, and differing only in *degree*, and in the *mode* of its operation. It dissolves, diffuses, dissipates, in order to recreate; or where this process is rendered impossible, yet still at all events it struggles to idealize and to unify. It is essentially *vital*, even as all objects (*as* objects) are essentially fixed and dead.[②]

---

① この場合 Plotinus は殊に重視される．Cf. Muirhead: *Coleridge as Philosopher*, p. 38 etc. Baker: *The Sacred River*, p. 71, etc.

② *Biographia Literaria*, i, p. 202.

「第二の想像力を私は第一の想像力の反響と考える．それは自覚的な意志と共存するが，その作用の種類に於ては第一のものと同一であり，ただその程度とその働きの様式に於て異るものと考える．その想像力は再構成するために溶解し，拡散し，分散し，或はこの過程が不可能とされるような場合に於ても，なお常に理想化し，統一化しようと努める．それは本質的に生命を持つものであることは，丁度総ての客体が（客体として）本質的に固定し生命を失っていると同様である．」

この定義によって我々が知り得る第一の点は，第二の想像力とは芸術創造の場合の想像力であるが，これは第一の想像力と本質的に同一のものであるということである．本質的に同一というのは，両者何れも創造的能力であるということである．第一の想像力は人間知覚の作用者であり，無限なる神の創造力を有限な人間の心のうちに反復するものであるが，第二の想像力もまた神の創造力の反響であるということが出来る．創造活動の根源は神にあるという考えは変らない．本質は変らないが，ただ程度が異り，またその作用の様式が異るのみというのである．Coleridge は屢々種類と程度ということをいい，その相違を強調したが，ここにもその考えが現われている．「その働らきの様式に於て異る」というのは，第一の想像力が認識一般に於て働らくに対して，第二の想像力は芸術の創作活動に於て働らくという意味に取るべきであろう．第一の想像力も第二の想像力も，共に創造的構成的能力である，ということは Coleridge が常に主張するところであり，或る時はこれを‘Esemplastic’な力といい，そのギリシヤ語の語源‘εἰς ἓν πλάττειν’即ち「一つのものに形成する」の意味を以て説明し，[1] また，或る時はこれを Einbildungskraft といって，一つ（Ein）に構成する（bilden）力（kraft）であると説明するのである．また，美を定義して多様の統一であるといい，‘multeity in unity’或は‘unity in multeity’という言葉[2]を好んで用い，また‘il piu nell’uno’というイタリヤのフレーズを屢々引用したことも合せ考えるべきことがらである．更に

① Ibid., i, p. 107.
② Ibid. ii, p. 230, 262.

附言すれば想像力は「統合的な魔力」(synthetic and magical power)[1]であり，又「形成的修飾的能力」(the shaping and modifying power)[2]である．又想像力の規則は「発展と生産の力そのもの」(the very powers of growth and production)[3]でもある．

ただこの第二の想像力はその素材を既に認識され知覚されて悩裡にある images に取るのであって，その場合，それらの images をそのまま用いるのではなくて，先ず「溶解し，拡散し，分散し」然る後，ばらばらになった心象を集合し，統一して新しい images や世界を作り出すものである．Coleridge はここであたかも化学的に新しいものを作るかの如く考えて化学用語を用いていると解すことが出来る．然し場合によってはそういった化学的な溶解が出来ない場合もあるが，その場合に於ても兎に角理想化し，統一化するのが想像力の任務である．想像力が統一化の力であることは先に述べたが，更にそれは理想化の力であるという考えがここに見られることも注意しなければならない．想像力は元来神の創造力の現われであり，統一ある一つの全体に形造るものであることは容易に理解出来るが，更にそれは理想的存在としての神の働きなるが故に理想化の力を持つと考えるのである．Coleridge が想像力の根源を万能なる神に求めていることを理解するならば，彼がその働きを理想化し統一化しようとする力であると考えた意味がわかるように思われるのである．勿論そこには Plotinus の哲学や Kant 哲学の影響も考えられるが，Coleridge が本来持っていた基本的思想から自然に流れ出した考えであるといい得るであろう．

この定義の最後に述べられた「それは本質的に生命を持つものである」ということについて既に第一の想像力についての説明に於てふれた故，ここには触れない．ただ Coleridge がここで用いた 'vital' なる語もやはり

① Ibid., ii, p. 12.
② Ibid., i, p. 193.
③ Ibid., ii, p. 65.

哲学的背景を持つ言葉であって，生命的，活動的というばかりでなく，有機的，統一的，ないし有目的的といった意味を内包していると考えられるのである．

以上に於て説明した Coleridge の想像力の思想は既に幾度も言及したように Plotinus などの Neo-Platonists の思想や，Locke, Hume, Hartley などのイギリス哲学，Kant などのドイツ哲学の思想を背景とするものであって，容易にその真意は捕え難いが，凡そ前述の如く解するならば，当らずといえども遠からずと思われるのである．

次に Coleridge の想像力説について述べねばならぬ点は，彼が想像力に対して空想力（Fancy）というものを対立して考え，その相違を強調した点であろう．即ち Coleridge によれば Imagination と Fancy は大いに異ったものであって，Fancy は Imagination のように統一的構成的な力ではなく，単なる思いつきの能力に過ぎないと考えるのである．Coleridge は先に引用した Imagination の定義に次いで，次のように Fancy を定義している．

> 'Fancy, on the other hand, has no other counters to play with, but fixities and definitess. The Fancy is indeed no other than a mode of Memory emancipated from the order of time and space; while it is blended with, and modified by that empirical phenomenon of the will, which we express by the word CHOICE. But equally with the ordinary memory the Fancy must receive all its materials ready made from the law of association.[①]'
>
> （「他方空想力は固定したものや有限なもの以外に戯れの相手を持たない．空想力とは実に時間と空間の秩序から解放された記憶の一様式に外ならない．一方それは，我々が選択なる語によって表現する意志の経験現象と結合し，それによって修飾される．しかし普通の記憶と同じく，空想力はその総ての材料を連想の法則によって用意してもらわねばならない．」）

我々はこの定義によって Coleridge のいわゆる空想力とは連想によって何か突飛なものを思い出す能力であるということがわかる．われわれが自

① Op. cit., ii, 202.

己の脳裡にある心象を意志によって選び出し，時間と空間に関係なく，結合し，修飾する能力である．「時間と空間の秩序から解放された」というのは，たとえばイギリスのクロムウエルと日本の西郷隆盛が会見する場面を想像する場合のように，時間的にも場所的にも全く関係のないものを一つに思い浮べるような場合をいうのであって，これは正に一つの戯れであり，遊びである．しかもその遊びの相手は神の霊のような空霊的なものではなく，人間やもののような固定し限定されたものである．羽の生えた馬や，空を飛ぶ竜のような存在を思いつく能力が空想力に外ならぬのである．まっ赤な日の出の太陽を赤くゆでたえびにたとえて

The sun had long since in the lap
Of Thetis taken out his nap,
And like a lobster boyl'd, the morn
From black to red began to turn.
(S. Butler: *Hudibras*, Pt. II, C. 2, V. 29)

(陽は久しくセーティスの膝に眠っていたが，
やがてその仮眠(うたい)から覚め
いまや朝は茹(ゆ)でられた鰕(あしたか)さながらに
黒から赤に変り初めた)

と歌った Butler は正に空想力豊かな人といわねばならないのである[①]．空想はただ連想によって互に無関係な二つの心象を結合するものであって，想像力のように構成的ではなく，多様に統一を与えるといったものではない．従って Coleridge に取っては空想力は想像力の下位にあるのであり，その両者は判然と区別されねばならぬと考えられたのである．

Coleridge が Imagination と Fancy の区別を意識し初めたのはいつの頃か詳らかにし難いが，1808年の Lectures に Imagination と共に Fancy を論じているので，そのころからではなかろうか．その後幾度かの *Lectures* や *Biographia Literaria* の先の定義の他 *Table Talk* のうちでも

① Coleridge: *Table Talk*, p. 184. (July 25, 1834)

言及があり，晩年に至るまでその考えをかえなかったのである．

かようにして Coleridge に於て想像力に関する考えは一応固定し確立したと見てよいと思う．そしてこの考えは Hazlitt, Hunt を初めとして Ruskin, Arnold, Pater, Wilde など十九世紀の主要なる批評家に受け容れられたばかりでなく，二十世紀に於てもこの想像力説の伝統は生きていると考えてよいのである．これについては次の篇に於て述べたいと思う．